

同級生
交歓



白洲次郎

白洲次郎(しらすじろう)

1919年(大正8年)、
17歳で英国ケンブリッジ大学に留学。
卒業後は英字新聞記者、
商社の取締役として1年の大半を海外で生活。
第2次世界大戦終結後は、
吉田 茂に請われ「終戦連絡事務局」参与に就任。
GHQを向こうにまわしての八面六臂の活躍は有名。
終生、英国仕込みの 紳士の哲学
「プリンシプル」を实践。
その服飾もすべからく英国紳士的。
写真は「白洲次郎の流儀」
(とんぼの本、新潮社)より。

男たちの靴下物語

靴下男

文=中野香織

靴下は(はかない場合も含めて)男の個性の数だけ可能性を秘める。
しかし、男たちよ、何を選ぶにせよ、自分がなぜこれを選ぶのかについて多少なりとも意識的であれ!
服飾史家、中野香織さんによる靴下コラムは、電車男ならぬ靴下男。

Text : Makoto Kajii Photo : Pak Ok Sun

Pull up your socks !



Photo : Topham/ORION PRESS

デヴァンシャー公爵
アンドリュー・キャヴェンディッシュ

この英国の最高貴族、
デヴァンシャー公爵家の出身者には、
物理学者もいれば英国首相もいる。
孫娘のステラ・テナントは、
ハイファッション・ブランドのコレクションにも
登場する有名モデル。

日本靴下事始め

しびれるほどかっこよく悠々と生きた日本男児として、没後ますますファンを増やしている日本版ジェントルマン、白洲次郎(1902~1985年)。

ヘンリー・ブールのタキシードを真つ赤なサスペンダーで着用したり、ミンクの裏地つきの特注コートを三宅一生に作らせたり、というタンディぶりもつとに有名なのだが、おっと、私は見てしまいましたよ、次郎さま。

大会社の会長のカンロクを漂わせ、堂々とリラックスして椅子に座った次郎さまの、組まれた長い足を包むトラウザーズと磨き上げられた靴との間に見えるものは……短いソックスとお脛すねの地肌！ きゃあ。ロマンスグレーの髪すらまぶしい完璧なタンディ、白洲次郎の足元にこんな初歩的なスキあり。これ、1960年前後の写真と思われる。「足元は長いホウズで覆い、決して脛を人前にさらすなかれ」という(常識)は、ほんの40年ほど前の日本においては今ほど普及していなかったのだろうか、ホウズそのものと同様に……。考えてみれば福助が脛をすつかり覆うホウズを大々的に発売して話題になったのもごく最近のことである。発売当時の男性たちの反応を見るに、そのホウズという呼び名すら、一般にはあまり知られていないようだった。日本男児の靴下に対する意識が本格的に底上げされるのは、ひよっとしたら、まさにこれから、なのかもしれない。

そもそも日本における靴下の歴史はそれほど長くない。日本で最初に靴下をはいたのは水戸黄門さまこと水戸光圀(1628~1700年)とされているが、その後、靴下を誰がどんなふうにはいたかというエピソードにはなかなかお目にかからない。吉田元監修の『日本洋装史』は、洋服が日本にとりいれられた頃の記録が豊富に掲載された大著であるが、そこにも靴下に関する記述はほとんど見られない。洋服店広告第一号とされる明治4年(1871年)頃の柳屋の広告も紹介されているのだが、コート、帽子、ネクタイ、香(ブーツ)、つけ襟にカフス、かばんに傘、股引までもが洋装の必需品として記されているのに、ただ一つ、靴下だけがないのである。福助が本格的に靴下製造を開始するのが昭和7年(1932年)ということだから、うーん、その空白の期間には、いったい洋装の日本男児は何をはいていたのだろうか……？

この問題は今後の研究課題とすることにして、では、靴下とのつきあいがより長い世界の男たちは、靴下とどのようにつきあってきたのかを見てみよう。

男の靴下世界

多くの服装読本によれば、スーツスタイルに合わせるべき靴下は、基本的に黒か濃紺の無地、であるらしい。これは19世紀ヴィクトリア朝の慣習の名残だろうか。当時、紳士が出世するには5種類の靴下をはき分けるべしとされていた。シルク、ウール、リネン、コットン、混紡。基本的に色は黒無地かグレイで、白い靴下はスポーツ用。靴とトラウザーズをスムーズにつなぐ役割を果たすべき靴下はけっして目立ってはならぬ、という原則は現代のスーツ読本にも受け継がれて

